
魔法大戦リリカルなのは☆ういざーずっ！

かぜのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法大戦リリカルなのは☆ういざーずっ！

【Nコード】

N9979X

【作者名】

かぜのこ

【あらすじ】

「魔法大戦リリカルなのはWizards」シリーズの番外編、閑話などを集めた外伝的短編集です。不定期更新、一部書き下ろしあり。

※本作はArcadia様にも投稿しています。

しーん1 **【新暦80年、新暦65年】（前書き）**

※初っぱなからわりと致命的なネタバレが発生しています。ご注意ください。

しーん1

【新暦80年、新暦65年】

薄暗い書斎。

カーテンで仕切られた窓の外には、茹だるような厳しい夏の酷暑が広がっている。

室内は空調が効き、過ごしやすい状態とはいえ、外から聞こえてくる蝉の鳴き声には精神的な疲労感を感じざるを得ない。

書斎らしく、壁一面に備えつけられたオーク材の書棚。一般的な小説等だけでなく経済学・法学や外交関係の専門書、分厚い哲学書、など様々な蔵書が整理整頓されており、同じくオーク材のシックなデザインの大形デスクが窓辺に据えられていた。

ギシ、と黒革のデスクチェアが軋む。

そこに深く腰掛けているのは、二十代中頃の青年。肩辺りまである癖の強い艶やかな漆黒の髪、大海を思わせる真蒼の瞳、整った多国籍風の精悍な面差しはどこか鋭くも優しげで。

ブルー系のポロシャツにクリーム色のスラックスというごく普通の服装であるが、佇まいと仕草の端々に育ちのよさがにじみ出ている。有り体に言って品がある。

彼は、ただ本を読んでいるだけで様になる。まるで一つの絵画のようだ。

「――パパッ！」

弾けるような甲高い声。ボタンと書斎のドアが勢いよく開かれ、十歳前後くらいの女の子がやってくる。灰白の髪を赤いリボンでツースайдテールに結った、くりくりとした紅い瞳がひどくかわいら

しい少女だ。

青年は顔を上げると、優しげに微笑む。そして少女の名前を呼び、自らの下に招き寄せた。

走り寄り、ちょこんと青年の膝の上に座った少女は肩越しに振り返る。

「なに読んだの？」

「写真のアルバムだよ。書架を整理していたら出てきたんだ」

「へえ……あつ、ママの写真だ」

分厚いハードカバーの書物は確かに写真を納めたアルバムで。

少女が目ざとく見つけたのは白い制服を着て、小さくはにかむ女の子の写真。少し色褪せたそれは、写り込んだ人物の愛らしさと美しいブロンドの輝きを変わずに残していた。

「やっぱり、ママは小さいころから美人さんだったのね」

「ははは、そうだね。でも君が言うのと、自画自賛に聞こえちゃうかな」

「当然よ。あたしだって、ママに負けず劣らずかわいくてきれいな美少女なもの」

得意げに鼻を鳴らす少女。

おしゃまな彼女らしい仕草を見て、青年は思わず苦笑した。

「まったく、誰に似たんだろうな？」

「パパじゃないかしら？ ママでないことはたしかね」

「否定できないのが辛いな」

少女のセリフに青年の苦笑が深かる。

たいへん利発でいい子なのだが、やや自意識過剰で自信過多なこ

の強気な少女は確かに、青年の普段の物言いや振る舞いを真似ているのだろう。どうやら、この家に時折訪れる“ぽんこつ”からも影響を受けているようだ。

「……あれ？ でもパパの小さいころの写真がないわ、どうして？」
「写真は、嫌いだからな」

何食わぬ顔で大人げないことを言う青年。実際、彼を写した写真は驚くほど少ない。かろうじて、集合写真で数枚あるくらいだ。

たとえば、今より幼い少女が自分とよく似たブロンドの女性に抱かれており、青年が女性の傍らに寄り添っている写真。オッドアイの女の子を抱いたサイドテールの女性と、眼鏡をかけた優しそうな青年が対になるように立っていて、その周囲をたくさんの男女が囲んでいた。

このように、決まって誰かと写ったものばかり。単独の写真は存在しない。

「パパは子どもねえ」

「男ってのはみんな、いつまでも子どもなのさ」

「はあ……」

何食わぬ顔で言い放たれた戯言、少女が白けた顔をする。

——だが、真実は少し違う。青年の好き嫌いというだけではなく、もっと不可避な理由で“この世界”での彼の幼少期の写真はなくなってしまったのだ。

青年の存在は、極々一握りの人々の記憶にだけ残り、それ以外の大多数は彼がいたことを覚えていない。
それはとても悲しいことだ。

「……ねえ、パパ」

「なんだい？」

聡い少女は気づいていた。

それと同時に、父と呼ぶこの青年のことをもっと知りたいと思う。

——彼が、たくさんの仲間とともに築いてきたこの平和を享受する一人として。そして、彼を父と慕う娘として。

「——むかしのこと、教えてくれない？ ママのこと、そのお友だちのこと、それから……パパのことも」

だから請う。思い出を分かち合いたいと。

「ああ、いいよ。じゃあ、何から話そうか……」

青年は朗らかに微笑み、少女の頭を撫でると、大切な思い出の詰まった記憶の本棚を紐解いた。

魔法大戦リリカルなのは☆ういざーずっ！

しーん1 「夏への扉」

“夏休み”――、それは世の学生が余すことなく待ちわびるである。

「ううー……ああーちいいい……」

さて、僕こと宝條攸夜がこんなくそ暑い中を屋外で過ごさなきゃならない理由を、ご覧の皆さんに説明しようと思う。

まあ何のこっちゃない、単刀直入に言えば待ち合わせただけなんだけどさ。

……しかし、日差しが辛い。忌々しいくらい日差しが辛い。
むしろ憎い。憎たらしい。憎々しい。

キャップ帽かぶってきてよかったよ、まったく。

『ご主人様、“心頭滅却すれば火もまた涼し”、ですよ』

左腕に巻いた無機物がのたまう。なんか久々に声を聞いた気がするのはなんでさ？

それはともかく。簡単に言ってくれるこの無機質に世の道理というヤツを教えてしんぜよう。

「夏は暑いものだろう、常識的に考えて」

月衣かぐやなら、本当に気の持ちようでもなるってのも知ってる

けどね。なにせ、その気になれば宇宙空間でだって活動できるらしいから。

ようは気持ちの問題なのだ。

ならば夏は暑いと固持したっていいだろう。

春はあけぼの、夏は海、秋は夕暮れ、冬は雪——日本には四季があるんだからさ。骨の髄まで楽しまなきゃ損じゃない。

『魔法使いは常識にとらわれちゃいけませんっ!』

「はいはい、決めゼリフ乙」

『ネタ発言が時代を先取りしている件について』

「お前も大概だよ」

とりあえずくだらない漫才で時間をつぶしてみる。……不毛だな。待ち人は未だ姿を見せず。暇を持て余していたので月衣の中からサッカーボールを取り出した。

んで、地面に転がしたそれに左足を乗つけて——

「よっ、と」

ボールを膝、胸と順番にトラップし、上まできたら地面に落とす。その繰り返し。たまに肩とかも使ったり。

体幹と重心を意識して、素早く正確に肉体を操作する。イメージとのズレは1ミリ以下だ、たぶん。

イメージといえば、なのはの運動音痴の原因は思考と実際の肉体スペックの齟齬らしいな。あの娘、無駄に演算能力高いから。

「やっ、とっ、ほっ——」

あとはまあ、そんな要領で全身を使って、適当にリフティングを続けていく。

いつもはだいたい100回くらいで失敗してしまうんだけど、そこまでやる気はない。所詮待ち人が来るまでの暇つぶしだしね。

最近、なのはのお父さんが監督をしている縁で、地元のサッカーチームの助っ人をやっている。ちゃんと入部してるわけじゃないから、あんまり派手なことはしてないけどさ。ちなみに野球はやるより観戦派です。

……だいたい、誰かに指示されたりするのは嫌なのだ。我慢ならいくらでもできるけど、その状態を続けたいとは思わない。

アインのヤツには常々『ご主人様は、もっと協調性を磨いた方がいいです!』と言われて耳たこだけど、この性格は生まれつきなんだから仕方ないだろ。

僕の魂は黄金色なのさっ!

「……………むっ」

考え事をしていたら足下が狂い、ボールが明後日の方向にてんと跳ねていく。

そのボールを拾ったのは、日本では珍しい白みがかった金髪に緑色の瞳の少年——待ち合わせの相手、我が友ユーノ・スクライアくん。本日は人間モードでご登場だ。

「や、待たせてごめん」

「待たせすぎだ。暇で退屈だったぞ」

「ごめんごめん」

言いながら放り投げてくるボールを額でキャッチし、そのまま乗っけてバランスを取りながらユーノに近寄る。

まあ、今日の集まりはこちらが頼んだことだし、強くは出れないんだけどさ。

「にしても、ユーノが遅刻なんて珍しいな。なんかあった？」

「いや、なのはの家に遊びに来てたアリサとすずかに捕まっちゃって。逃げるに逃げられなかったんだよね」

「かわいがられたわけだ」

「まあ、それなりに」

「お前ね、ちよつとは否定しろよ……」

このラブコメ体質め。

まあ、別に羨ましくもないけどさ。

だってほら、僕ってばアタックしてフラグ立てられて攻略される側だし——ってなんだそりゃ。変な電波受信したし。

「ま、いつか。んじゃ、行こう」

「うん」

＊ ＊ ＊

我が家である。

涼しい涼しい我が家である。

エアコンの効いた我が家である。

大事なことから三回言ってみた。

「ユーノ、この形容詞についてなんだけどさ」

「ああ、ここはね——」

現在、僕の自室にてミッドチルダ語のお勉強中である。

かてきょーはもちろんユーノ君。こっちでの衣食住のサポートと引き換え——ってわけじゃないんだが、なんか心苦しいので家に泊めたりしている。なのはとの「同居」はいろいろと辛いらしいからね。……ラブコメ野郎め。

キツカケは、フエイトに。

とりあえず付け焼き刃で、そのうち日常会話に使う単語は読み書きできるようになった。何度かビデオレターに紛れさせて送ってるしね。

で、そのまま何となく続けてるってわけ。こだわるときは徹底的だから、僕は。

夏休みの宿題？　んなもん、最初の週に全部終わらせてるっての……算数のドリル以外はね。

「なるほど。日本語でいうところの、“心頭滅却すれば火もまた涼し”なのかー」

『まさしくタイムリーですねえ』

「ベルカっていう、今は滅びた文明由来の故事だよ」

「それってあれだろ？　滅びて百年もたってないのに古代扱いされてる間抜けな文明だろ？」

「間抜けって……ま、まあ、便宜上だからね」

「古代って言葉が軽すぎて、なんだか不愉快だぜ」

コンコンコン。不意のノック。

「攸くん、今ちよつといいかしら？」

「姉さん？　いいよー」

部屋のドアが開く。

白いケーキの箱と入れ立てのアッサムティーを手に入ってきたのは我が姉（叔母）、ルーチェ・モルゲンシュテルン。くるくるドリルヘアーがチャームポイントのきれーなおねいさんである。

「いらっしやい、ユーノ君」

「は、はい、おじゃましてます」

美しすぎる年上のおねーさんの微笑みに、ユーノ君はタジタジだ。ちなみにユーノのことは同じクラスのクラスメートの級友と説明している。さすがに姉さんとはいえ、本当のことを説明するわけにはいかない。

二言三言、姉さんと世間話して。おお、おやつは翠屋のケーキ詰め合わせだ。……じゅるり。

「じゃあ、お勉強がんばってね」楚々とした印象と、上品な香水の香りを残して姉さんは部屋を出て行く。

「……」

「惚れるなよ、ユーノ」

「ちっ、違うよ!」

「どうだか」

ぽーっ、と姉さんの消えたドアの方を覗てたユーノを適当にイジりつつ、勉強に戻る。

ミッド語を真面目に勉強してることに、邪な意図がないとは言わない。むしろポイント稼ぎとか思ってるけどね。

別れ際、あの娘にリボンを贈ったのはに對抗して、手書きの手紙を贈ったら喜んでくれるかなってさ。実際喜んでくれたし。

『ご主人様は、案外打算的なんですね』

うっせえ。あんな世にもかわいい女の子とお近づきになりたいと思うのは、男として当然の本能だろう、常識的に考えて。

——うぬっ、アースラとか時空管理局に、僕と同じことを考えるロリコン犯罪者予備軍がいなくても限らんか。……主に黒いのか。

うわ、なんか急に心配になってきたっ!

……………潰すか?

『ご主人様は、過保護な上にヤンデレですね』

うっせえ、大きなお世話だ。

つかモノローグ読むんじゃないねえよ。小癪なヤツめ。

「ユウヤ、手止まってるよ？」

「あ、悪い悪い」

——とまあ、そんな感じで。

とある夏の一日は過ぎていくのだった。

しーん2 **【新暦65年】** (前書き)

※時系列が前後しているのは仕様です。あらかじめご了承ください。

しーん2 【新暦65年】

はじめましての人にははじめまして。そうでない人にはこんにちは。わたし、高町なのはです。

今日は、フェイトちゃんに送るはじめてのビデオレターを収録する日。わたしの家族や友だちみんなを、フェイトちゃんに紹介するつもりです。

もちろん、黒い髪の子もいっしょなんだけど……………。

しーん2 「高町なのはとゆかいな仲間たち」

「お邪魔します」

ガラガラッと引き戸を開けて、いつもの青いパーカーを着たまっ黒い髪の男の子がうちの玄関に入ってきました。

待ちかまえていたわたしとおかーさんが、すかさず声をかけます。

「いらっしやい、攸夜くん」

「いらっしやい。あなたが宝條くんね？」

「はい。はじめまして、宝條攸夜です」

おかーさんがたずねます。攸夜くんは普段はあんまり見せない種類の――すごくあいそがいいです――笑顔で名乗り、ていねいにお辞儀しました。

「うちのなのはいつもお世話になってます」

「いえ、僕の方こそ、なのはさんには転校初日からお世話になりっぱなしで……」

「あらあら、そうなの？」

などと、わたしをおいてけぼりにして、二人は世間話に花を咲かせはじめてしまいます。

むっ、さすが攸夜くん、こういうところはやっぱりあなどれません。フェイトちゃんをそうそうに攻略しただけのことはありますね。

あ、ちなみに攸夜くんが名前で呼んでくれるようになったのは、フェイトちゃんと別れてからすぐのことです。初めはしぶった攸夜くんですが、いろいろあってけっきょく折れて“なのは”と呼んでくれるようになりました。なし崩し的に、アリサちゃんやすずかちゃんも名前で呼んでいます。

「ああ、そうだ。これ、大した物じゃないですがお土産です、皆さ

んでどうぞ」

「あら、これはご丁寧にもありがとうございます」

「中身は手作りのマドレーヌです。まあ、あんなにおいしいケーキ屋をやってるって知ってたら、別の物を持ってきたんですけど」

ほほをカリカリとばつが悪そうにかく攸夜くん。わたしは違和感をおぼえ、問いかけます。

「攸夜くん、翠屋に来たことあるの？」

「ああ、うん。前に保護者の姉貴分と一度ね。シュークリームがうまかった」

おかーさんのシュークリームは絶品なのです。

「あ、思い出した。金髪の綺麗な娘さんと一緒に来てくれてたわね」
「ええ、たぶんそれです」

へー、金髪のおねーさんですか。

なるほどー、だからフェイトちゃんにこだわってたんですね。攸夜くんはメンクイさんだということが判明しました。……アリサちゃんやすずちゃんもわたしから見るとどっちも美人さんですが、そのへんどう思ってるんでしょうか。ちょこっただけ興味があります。

いえ、べつに好きとかそういうんじゃないんです。フェイトちゃん、なんとなく攸夜くんのこと気がになってるみたいですから、“親友”としては力になってあげたいなって。

なのはは「フェイトちゃんを応援し隊」会員ナンバー1号なのです。

「ところで、あのシュークリームのタネについてなんですけど――」

「ああ、それはね——」

あー、またお話をはじめちゃいました。なのはまたおいてけぼりです。

おかーさんたち、かなりハイレベルなお料理の話題でもりあがってます。ぜんぜんわかりません。……わ、わたしまだ小学生だから、お料理できなくてもいいんだもんっ！ うぐう。

* * *

そんなこんなで“おとめごろ”を傷つけられつつ、攸夜くんを案内してリビングに移動しました。

ソファアーセットのまわりには、おとーさんと、恭也おにいちゃんに美由紀おねーちゃん。それから先に来ていたアリサちゃんとすずちゃん、フェレットの姿のユーノくんもいます。

あ、攸夜くんとユーノくんがアイコンタクトしてます。なかよしなのはいいことです。

初対面の攸夜くんとおとーさん、おねーちゃんが挨拶を交わします。おねーちゃんに「メガネがよく似合ってますね」なんて言って……、攸夜くんはいい加減にしたほうがいいと思うの。あとでちょっと“おはなし”したほうがいいかな？

「——なるほど、じゃあ今はご両親とは離れて暮らしているんだね？」

「え——、ええ、両親は揃って海外出張中なので、叔母のところに厄介になってます」

おとーさんの質問に攸夜くんはちょっと戸惑ったように答えます。そのことが少しだけ私の心の中にひっかかりましたが、それ以上深くは考えませんでした。

そんなふうには雑談を交わして、いざビデオレターを録画しようとしたとき、私はあることに気がつきます。

「あれ、攸夜くんは？」

「……言われてみれば、見あたらないな」

「私も見えてないよ」

おにーちゃんが部屋の中を見回して、おねーちゃんがそれに続きます。

ふと視線を落とすとユーノくんがつんつんと私の膝を突つついていました。

「なに、ユーノくん？」

ユーノくんの指さすほうに目を向けると、リビングから出ようとしている攸夜くんの姿が。

いつの間にあんなところまで行ったのでしょうか。

「……なにやってるの？」

「え？ あ、ああ、うん。いやさ、僕がいても邪魔だろうし、帰っていいよね？」

攸夜くんは引きつった笑顔で私の質問に答えます。

その様子に思わず、

「邪魔なわけないよ！ フェイトちゃん、攸夜くんに会いたいって思ってくれてるはずだよ？」

と声を張り上げてしまいました。でも、仕方ないよね？ フェイトちゃんからあんなに想われてるのに、ヒドすぎです。キチクです、

キチク……自分で言ってる意味わかってませんけど。

「あー、いや、それはわかってるつもりだけども……」

「なによ、はっきりしないわね。言いたいことがあるならちゃんと
言いなさいよ」

アリサちゃんが攸夜くんを問いつめます。

「僕さ……」

なんだか気おくれしたカンジの攸夜くんは、つーつ、と視線をわたしたちから逸らしました。どうしたのかな？

「————ビデオとか写真に写るの、嫌いなんだ」

「「はあ？」」

その言葉に、その場にいた全員が呆氣にとられるやら苦笑するやらで、変な空気になりました。わたしも「ぽかーん」です。

「ほら、写ったら魂抜かれそうじゃない？」

「アンタは明治人か！」

アリサちゃんの鋭いツツコミが炸裂します。さすがアリサちゃん、
キレのあるいいツツコミです。

「攸夜君、わがままはよくないと思うよ？」

「うぐっ」

とてもイイ笑顔のすずかちゃんが、攸夜くんを確保します。エリ

のところをつかんで引きずってきました。

「ちょ、すずかさん、首が絞まってるんですけど?」

「うん、絞めてるんだよ?」

にこやかに答えるすずちゃんの背後に、黒いモヤモヤが見えた気がしました。ずりずりと床を引きずられる攸夜くんは苦しそうにうめいています。

……まあ、ジゴウジトクですね。

そのあと、グダグダ屁理屈をこねるあきらめの悪い攸夜くんとおはなし”して、ビデオレターはちゃんと録画できました。

フェイトちゃん、よろんでくれるとうれしいな。

ちなみに、おみやげのマドレーヌはみなでおいしく食べました。うちの家族にとっても好評でしたが、そのときに「狙いどおり」っていうカンジのわるーい顔をしてたのをちゃんと見てたからね、攸夜くん。

* * *

次元航行艦アースラ。

件の少女、フェイトは自分に割り当てられた部屋で、つい先ほど届けられたビデオレターを見ていた。彼女の使い魔であるアルフも当然一緒だ。

『えー、というわけで僕はぼちぼちやってるよ。そっちはどう? 不自由してない?』

映像に映っている自分と同じ年頃にある黒髪の少年は、照れくさそうにはにかんで言葉を発している。その様子に、フェイトは笑みを禁じ得ない。

このビデオレターを収録した際の、ちょっとした騒ぎを知っていたら違った意味で笑っていただろうが、幸いにも彼女はそんなこと知る由もなかった。

『——それと、ちょっとしたプレゼントを同封しといたから、受け取ってくれるとうれしい』

「プレゼント？」

「んー……たぶん、これじゃないかい？」

アルフが30センチ四方程度のシンプルな白い箱を取り出す。それを受け取ると、フェイトは密かにドキドキしながら中身を確認した。

「これって……」

「……ハエ？」

箱の中には、今のフェイトが抱きかかえるのにちょうどいいサイズのデフォルメされた毛糸製のハエのあみぐるみが入っていた。ちなみに、カラーリングは身体が黒と黄色のシマシマで、目が赤である。

「手紙がついてるね。おつ、ちゃんとミッド語で書いてあるなんて、気が利いてるじゃないか。えー、なにに……」寂しい船の暮らしに少々の潤いを。僕の編んだあみぐるみ、“ぽんこつくん十七号”を贈ります。大切にしてね☆」だってさ。

——しかし、趣味が悪いねえ。どうせ送るならハエなんかじゃなくて、もっとかわいらしいのにすりゃいいのに。ねえ？ フェイト？」

アルフが手紙から視線をあげると、頬をほんのり朱に染めてファンシーなあみぐるみを大事そうに抱き抱えた自分の主の姿があった。

「かわいい……」

「え……いや、フェイトが気に入ったんならアタシはそれでいいんだけどさ……」

軽く倒錯したように呟く主に使い魔は少し引き気味だ。

と、その時、部屋のドアが勢いよく開かれる。

「フェイトちゃん、それはさすがにないと思うの！」

そんなことをのたまって、かわいらしいデザインの白い制服に身を包んだ特徴的なピッグテールの女の子が現れた。

「えっ！　なのは！？　ど、どうしてここに？」

「フェイトちゃんへのあふれんばかりの友情で、時空を超えてやってきたんだよっ！」

フェイトが目を見開かんばかりに驚愕し、なのは？は明らかに嘘っぱちなことを口にした。というか、テンションがおかしい。

混沌とした空気が部屋に流れる中、なのは？の後ろには呆れた表情をするクロノの姿。

「艦長。戯れはそれくらいにしておいてください」

「あら、クロノ。そんなに早くバラしちゃダメじゃない」

なのは？は急に口調を変えて、つまらなそうにクロノを見やる。クロノが“艦長”と呼ぶ人物は、このアースラにおいて一人しかない。

「艦、長……?」

フェイトが不思議そうに呟くと、なのは?はポンと愉快的音と煙を立てて姿を消し、次の瞬間にはネイビーブルーの制服を身に纏った妙齡の女性が入れ替わるように出現した。

「り、リンディ提督うっ!?!」

「……艦長はこう見えて、変身魔法の名手なんだ。僕も子どもの頃はよくおちよくられたものだよ」

「ごめんなさいね、フェイトさん。ちょっとからかってみたくて」

ペロツと舌を出しておどける一児の母。その息子と言えば、頭痛を感じるように眉間に指を当てて嘆息している。

「つつつつ!!」

この後、怒れるフェイトの声がアースラの艦内に響き渡ったのは言うまでもない。

——今日も今日とて、アースラは平和だった。

海鳴市の住宅街にひっそりと立つ高級マンション、その最上階。

以前は時空管理局の次元航行艦アースラのセーフハウスだったところであり、今現在はハラウン一家のマイホームであるその一室。メゾネット式の上階が見える、だだっ広い室内はまさに成功の象徴。ハイソな雰囲気たっぷりなここは、俺こと宝條攸夜にとっても馴染みの深い場所だ。階が一つ違うとは言え、半年ほど住んでいた場所だからな。

駄菓子菓子……だがしかし、穏やかな家族団欒の舞台となるはずのリビングは今や、公開処刑の場と化していた。

「……（にここにこ）」「……（ぴくぴく）」「……（にやにや）」

目の前のソファに腰を付けるのは、世にも恐ろしい三人の怒れる美女。この三人の前では裏界魔王も裸足で逃げ出しそうだ。

鬼子母神と阿修羅、それから……小悪魔？ あ、あとおまけの一人息子もね。

皆さん、程度は違うけど静かに怒ってらっしゃるわけで。

フロアリングの堅い床に正座で黙する俺は、沈痛な面もちで頭を垂れて粛々と断罪の時を待つばかりだったのであった。

————拝啓、母さん。俺の命運、そろそろ尽きそうです。

しーん3 「大魔王の憂鬱」 宝條攸夜、帰還一日目のこと

「それで、釈明の言葉はあるか？」

ソファの横に立っているクロノさんが高圧的な口調で詰問し、こちらを見下ろしている。相変わらずいい好かない人だが、未来のお義兄さん（確定）なので無碍にも出来ない。

ちなみにだが、正座する俺の目の前のソファに腰掛けて緑茶――息を吸うがごとく、砂糖をザバザバと入れていた――を啜っているのがリンディさんで、エイミィさんとアルフがそれぞれ左右に。クロノさんは前述のように立っていて、フェイトは俺の側に持ってきたスツールに座っている。

「いえ、全て仰る通りですハイ」

そもそも、事情を話すと言って嘘を吐いたのも、逃げるように姿を眩ましたのも事実なので否定のしようもない。

素直な態度が気に入らないのか、大胆に脚を組んでいるアルフが

面白くなさそうに「ふん」と鼻を鳴らす。

(このやろう、いぬっころの分際で……)

などと心の中で悪態を吐くが、口には出さない。というか出せない。

今、ヒエラルキー最下層を絶賛驀進中な俺である。反抗などしたら最後、フルボッコは確実だ。まあ、フェイトは優しい娘から庇ってくれるだろうけど、そんなのは男としてのプライドが許さない。だったら滅多打ちに糾弾された方が何百倍もマシだと思う。

物理的にも精神的にも四面楚歌な現実から逃避気味に、現状を整理してみよう。

——諸々のことを終えてようやくゆっくり出来るようになった俺は、フェイトの誘いで彼女の自宅に招かれた。喜び勇んで向かったわけだったのだが、そうは問屋が卸さない。というか、むしろ飛んで火に入る夏の虫？

玄関先で待っていたのはニコニコ壮絶に笑顔なリンディ・ハラオウン女史。それから、憤怒のあまり瞳孔が開ききったアルフと、にこやかだが少々危険な空気を纏うエイミィさん。ついでにクロ助、もといクロノさん。

で、なだれ込むように始まったのがこのいわゆる家族会議というわけだ。いや、床に正座したのは自分の意志でだけどさ。

「攸夜君？」

「……はい」

一家の長、リンディさんがついに口を開く。

天網恢々疎にして漏らさずだな、としようもないことを考えていた俺は弾かれるように背筋を伸ばして居住まいを正した。

「どうして六年前、あんな嘘までついて姿を消したのか私たちに教えてくれる？」

「……あの時は、あれが最善だったからです」

「——はあ、なるほどね。それ以上のことを話すつもりはない、といたいたのかしら？」

「……………」

無言の肯定に、ため息混じりで眉を下げるリンディさん。そんなガツカリした表情されてもこれ以上言い訳も出来ないんですが。

なお、リンディさんやクロノさんたちの記憶の修復についてだが、本人たちいわく“いつの間にか思い出した”そうだ。

おそらく、俺とこの世界とを繋げたキーであるフェイト——正確には彼女の所持している“モノ”——に接触したことで、誘発的に修復が起きたのだろう。速度というか可能性の要因は俺との繋がりの深さ、と言ったところか。

アリサやすずかなんかは顔を合わせてすぐに思い出してくれたしな。

「いいか？ 大体、君はだな——」

そして始まるクロノさんのお説教。ミッドチルダでひと暴れしたことについては無論、六年前の素行の悪さまで掘り返しては延々と続く。

至極まっとうな正論だし、反論する気など毛頭ない俺は神妙な顔をして「面目次第ありません……」と答えるだけだ。

クロノさんはどうやら返答がお気に召さなかったようで、眉間に皺を寄せて無然とする。

「僕が聞きたいのは、そういった当たり障りのない謝罪の言葉じゃないんだ」

「お兄ちゃん、ユーヤも反省してるんだしそれぐらいで、ね？」
「しかしだな……」

俺の窮状を見かねてフェイトが助け船を出してくれる。
だがね、お嬢さん。残念ながらそいつはこの場じゃ逆効果なんだよ。

「フェイト、あなたは少し黙っていなさい。反省しているしてないはこの際、関係ないのよ」

「そうだよ、フェイト。アタシも頭に来てるんだからね」

「今回ばかりはおねーさんも擁護できないな。攸夜君、おいたがすぎたね」

ほら来た。リンディさん、アルフは勿論のこと、傍観を決め込んでいたエイミイさんまで同調。マシガンのごとく矢継ぎ早に畳み掛けられたおかげ、でフェイトは涙目だ。かわいい。

おおう、女性陣の醸し出す鬼気に気圧されてクロノさんまで引いてるじゃないか。

「攸夜君」

騒然とする場の空気を締めるように、リンディさんが声を発する。

「正直言って、あなたには失望しました。——そういうわけだから、フェイトとのおつき合いは認められません」

「は……?」

はいいいいい!?

いきなりしれっとナニ言ってやがるんですかこのお人はッ!

「ちょ、まっ!？」

「か、母さん!？」

不意打ちに、フェイトが血相を変えて動揺。俺も似たようなものだろう。ていうか、どういう話題転換だよ。

渦巻く感情のコントロールに苦慮して言葉を窮していると、クロノさんが口を挟む。

「いや、母さん待ってくれ。確かに僕もこんな奴との交際には大反対だが、今その話は関係ない――」

「はいはい、クロノ君はちょっとあっち行っとうね」

「エイミィ、いつの間に!？」 は、放せっ! 僕の話はまだ終わってないんだぞ!」

が、後ろからエイミィさんに羽交い締めにされて、どこぞに引きずられていく。男女の体格差を無視とは……恐ろしい。

……あれ? 何かムカつくこと言われたような気がするんだけど。まあ、いいか。

「フェイトもいいわね？」

「い、いやっ!」

意識の糸を紡ぎ合わせたフェイトが、“母親”の言葉に反発して声を荒げる。クールというか、穏やかであり感情を露わにしないタイプのフェイトにしては、らしくない反応だ。

それから、横合いから寄ってきてびったり抱きつかれた。

「やっと……、やっと逢えたのにユーヤと離れるなんていやだ。母さんがなにを言っても、別れたりなんかしないから!」

瞳を涙で潤ませて強く主張するフェイトの横顔に、俺は心を打たれた。好きな女の子にここまで想われて、嬉しくならない男が居るわけがない。彼女の気持ちに応えるように腰に腕を回して抱き寄せる。ほっそりと引き締まったくびれに少しドキドキしたのは秘密だ。両者はぴりぴりと緊張感漂わせて膠着状態に陥っている。若干以上でフェイトが押され気味か。

ふと視線をやると、アルフがフェイトの言葉に腕を組み、うんうんと感慨深げに頷いていた。……味方してくれてる、のか？ 少し意外だな。

「……その子はそう言っているけど、攸夜君はどうする気なのかしら？」

「そうですね……」

試すような物言いに引っかかるものを感じながら、腰を軽く浮かして正座から片膝立ちに。視線は、毅然とした母性溢れる表情のリンディさんに向けたままだ。

「フェイトを連れて駆け落ちでもしますよ。もう絶対に離さないって約束しましたから……今度こそ、ね」

腕の中のフェイトが驚く気配を感じつつ、分割思考を駆使して逃走のリスクをシミュレートする。

六年前とは違い、今の俺には時空管理局そのもの（……）という絶大な後ろ盾がある。当時、考えたように逃げ隠れる必要もないし、やりにくいとは思うけどフェイトも仕事を続けられるはずだ。

借りを作ることになるが、評議会のじじいからミッドの戸籍を買って定住するってのもまあ悪くない。“故郷”を捨てるなんて本意じゃないけどな。

管理局上層部の後ろ暗い——というか、ドス黒い実状を少なからず垣間見たから言える。あの時、短慮に走らなかったのは正解だった。

下手に逃げ出して隠れ住んだとしても、まともに生活が出来るものではないし、捕まった後にふたりで仲良くモルモット、という未来もあり得たかもしれない。

それを考えると虫酸が走る。

正直、俺自身はどうなろうとかまわないが、フェイトは言うまでもなく別だ。そんな姿、想像するだけでも発狂しそうなくらいに胸くそ悪い。

「ユーヤ……？」

ザリザリと、脳髓を削られていくような感覚に苛まれる俺を、フェイトが心配そうに見上げている。「大丈夫だよ」と笑いかけて向き直る。

「いい加減、不毛な腹の探り合いは止めませんか、リンディさん。フェイトが怖がってますし」

「あら、気づいてたの？」

リンディさんが相好を崩して、はんなりと上品に微笑む。やっぱりか。

まったく意地が悪い人だ、と内心で文句を垂れて種明かし。

「あんな唐突な話題の変え方じゃ気付きますよ、そりゃ。何より、リンディさんのキャラじゃありません、あんなの」

「ふふ、そうかしら。……ごめんなさいね、現役時代の癖がなかなか抜けなくて。それに、“こういうこと”一度やってみたかったの」

うふふ、とお茶目に笑ってウィンクする二児の母。間の抜けた様子に力が抜ける。「お前なんぞにうちの娘はやらん！」ですかそうですか。

というか、心臓に悪い冗談は止めてください。マジで。

「えっ、と……?」

「俺たち、どうやらリンディさんに一杯食わされたらしいよ」

「それじゃあ……」

「ええ、母さんは賛成よ。攸夜君の人となりは、重々承知していますからね」

ふわりとした微笑。

あるいは、今回の吊し上げは俺を試すためのものだったのかもしれない。随分な歓迎ですねっ！

「さあ、お夕飯にしましょう。今夜は攸夜君が帰ってきたお祝いよ」
「あ、俺も手伝います」

立ち上がったリンディさんに倣って腰を上げる。が、フェイトにシャツの裾をガシッと捕まれて止められた。

「ユーヤはお客さんなんだから座って待ってて」

「いや、でもな……」

「いいからっ。行こう、母さん」

言うが否や、フェイトがキッチンへててつと駆けていく。「攸夜君、ゆっくりしててね」と言い残したリンディさんと、いつの間にか子犬モードになっていたアルフがその後に続き。キッチンの方では、エイミィさんがすでに準備をしていたようで、彼女と合流すると調理を開始しされた。

この場に残されたのは、フェイトの普段見れない押しの強さに呆気にとられた俺と、むっつりやってきてソファに深く腰掛けたクロノさんだけ。

男は体よく蚊帳の外に閉め出されてしまった格好だ。……仲間外れにされたみたいで少し府に落ちないが。

（まあ……、いいか）

けれども、楽しそうに調理をしているフェイトを眺めていたらそんな些末事、どうでもよくなってきた。どうやら新しい母親や家族とも上手くいっているようだし。

——それに、だ。

黄色いエプロンを着こなしたフェイトは、筆舌に尽くしがたいほどキュートで、かわいくて、愛しくて。

俺は、そんな彼女の姿を見ただけでホクホク満足していたのだった。

白いダイニングテーブルを囲んでの会食の時間。“お祝い”というだけあって、テーブルに乗った料理はなかなか豪華だ。

メインには熱々のラザニアに具だくさんのクリームシチュー、焼きたての海鮮ピザなどなど。サイドメニューは、山ほどのシーザーサラダとふかふかのバゲットだ。どれもハンパなく大量に用意されている。……張り切って作ってくれたのは嬉しいけど、俺、こんな食えないぞ？

それはともかく。欧州の香りたつぷりな献立はなるほど、ミッド風であるとも言えた。聞いた話によると、ここ（地球）から向こうに移住したヒトの子孫とかもいるらしいな。

「……」

とりあえず、フェイト自ら焼いたというピッツァ（ピザに非ず）を食べてみることにした。何故にそのチョイスなのかは永遠の謎である。テストロッサだけに、なのか？

……ふむ、見た感じは悪くないな。いや、むしろよく出来ている。手作りの生地もちゃんと丸くなっているし、トマトソースの赤い絨毯に乗ったエビやイカ、ホタテなどの魚介類が色鮮やかに食欲を誘う。

二等辺三角形に切りそろえられた一枚を手取る。とろとろに溶けたチーズが糸を引いててうまそうだ。

隣で心配そうにこちらを見ているフェイトを視界の隅に納めつつ、パクリ。

……………。んむ、なるほどなるほど。

「ど、どお……？」

おずおずと探るように尋ねるフェイト。小首を傾げる仕草が小動物みたいですごくかわいい。

あんまりかわいらしいもんだから、ちょっといじめたくなる。がまあそれは思うだけにしておいて、素直に感想を言ってあげることしよう。

「ああ、すごくおいしいよ」

過剰な装飾は必要ない。恋人の手料理、という欲目を抜いても本場顔負けな味だと思う。イタリアに行ったとき、実際に食べたからよくわかる。

俺の感想に、ぱああっと表情を明るくしたフェイト。「よかった……」と安堵のため息を吐く。

もっとたくさん食べて、とのリクエストに応え、俺はほとんど全部平らげた。……満面の笑顔でそんなこと言われたら、食べきるしかないじゃないかっ！

「あっ、ユーヤ、口にソースついてるよ」

「ん？」

白いハンカチが口元に伸びてきて、赤いソースを拭い取っていく。……何だかすごくデジャヴを感じるな。

「うん、とれた」

——ああそういえば、前にもこんなことあったっけ。よし、これ

をネタに少しイジってやろう。

「ありがとな。……それにしても、指で拭って食べてくれないのか？」

「っ！ も、もうそんなことしないよっ！」

フェイトが肩を怒らせ、必死に否定する。かあああっと音が聞こえるくらい、真っ赤に茹で上がってちゃ怖くも何ともないがな。

畳み掛けるように「それは残念だ」と煽ったら、恥じ入って俯いてしまった。

「……」

ふと不審な視線を感じて周りを見渡してみれば、ぽかんと間拔けな表情をしている人々。

足元でステーキ肉にかぶりついていたアルフまで、馬鹿みたいに口を開けて見上げてやがる。

みんな、食事の手を止めて凍りついていた。

——あ、いや、リンディさんだけは、あらあらうふふと捕らえ所のない上品な微笑してるけど。

「何です？」

どうして固まってるのかは大体予想がつくので、白けた視線を送り返してみた。

「いやー、仲がおアツいなあと思って」

再起動したエイミィさんが代表して答える。気まずそうに苦笑しているが、シレッとからかってくる辺り油断ならない。ま、その程

度じゃ俺は動じないがな。

ではお返しに、もう一つ爆弾を投げ入れてみますか。

「羨ましいでしょう？　そういうお二人はどうなんですか？」

「おおっと、そう切り返しますか。腕を上げたねえ、攸夜君。ちなみにその質問については黙秘権を行使するよ」

何の腕だよ。

エイミィさんは一転してところどころ楽しげに笑っているが、クロノさんは軽く赤面してシチューをかつこんでる。

しかし、カマを掛けただけなんだが当たりだったか、このむつり屋さんめ。

フェイト？　会話の意味がわからなくてキョトンとしてるよ。

「あ、そうそう！　ねえ、ふたりってどこまで進んでるのかな？」

興味津々に瞳を輝かせるエイミィさん。この会話の流れならそういう話にもなるだろうさ。

「キスまでですよ」

「「！」」

何気なく正直に即答したら、ざわりと場の空気が騒然となった。主に、狼狽したフェイトとクロノさんが盛大に吹き出したことによって。

むせてるフェイトの背中をさすってあげると、恨みがましい目で見られた。

そんな目で見ないでくれ。無性に罪悪感が湧いてくるから。

「いや、ごまかすようなことでもないだろ？　男と女なんだからさ」

「わあ、大胆」

言いながら、エイミィさんはチラリと横目でハラウンさんちの長男を窺う。当の本人は気まずそうにサッと視線を逸らして咳払い一つ。エイミィさんがはあゝ、と大きなため息をもらす。

——とまあこのように、夕食は概ね和やかに進んだ。

そんな中、リンディさんが興味深そうに目を細めて、俺を——いや、俺とフェイトを眺めていたのがやけに印象に残った。

余談だが、明らかに作りすぎだと思われていた食事は、フェイトさんがペロリと平らげてくれましたとさ。

ちゃんちゃん。

* * *

夕食後。

バスルームからリビングに向けて歩きながら、水分をたっぷり吸ったごわごわの髪をタオルで叩くように乾かす。成長して髪質が変わったのかは知らないが、最近さらにボサボサになって正直鬱陶しい。

ソファに座ってお茶していたリンディさんとフェイトが、俺の気配に気づいて振り向いた。

「攸夜君、お湯加減はどうだったかしら」

「はい、いいお湯でした」

「そう、それはよかった。じゃあフェイトもいってらっしゃい」

「うん。じゃああとでね、ユーヤ」

名残惜しそうに手を振るフェイトは、俺と入れ替わりで廊下に消えていく。ぱたぱたとスリッパが慌ただしく床を叩く音が耳に残った。……ていうか、あんなに落ち着きのない娘だったっけ？

このやり取りからもわかるように、今夜はハラOWNさんちに泊めてもらうことになった。

その経緯を説明しよう。

まず前提として、フェイトは中学を卒業するまで海鳴に居る予定だという。当然のことだが、これから彼女とつき合う——もちろん、男女の仲的な意味で——には根無し草ではどうにもよろしくない。まあ、戸籍なんかは割と簡単に偽造出来るんだけどさ。

しかし、以前住んでいた部屋はすでに埋まってしまっている。だから、仮の住まいとして近場の適当なアパートなりを間借りするつもりでいたんだが、姉さんの強い意向もあって何故か隣り街——遠見市、だったか——の高級マンションということになってしまった。姉さんいわく「由緒正しい裏界魔王がそんなところに住むなんてみつともないわ」とかなんとか。プライドが高すぎるのも考え物だ。でだ。その住処を準備するにはどうしても時間がかかる。家具やら何やらだって揃えなきゃならないから、今夜は野宿でもしようかと思っていた。幸い野営には慣れてるし——その理由については後ほど語ることになるだろうが——、月匣というかフォートレスを張っておけばそれで済むしな。

それを夕食の場で話してみたらフェイト以下、その場の全員から大いに反対されてしまい——、まあ、そんなこんなでお泊まりとなったわけである。ちなみに後でホテルでもとればよかったと気づいてちよつとへこんだ。

「攸夜君、ひとついいかしら」

ソファに腰掛け、風呂上がりの気だるさを楽しみながら、つらつらと今後の予定などに思惟を伸ばしていると、リンディさんに改まって呼びかけられた。

その表情はどこか硬い。

「あ、はい、何ですか？」

薄い湯気を上げる湯飲みがコトリと白いリビングテーブルの上に置かれる。

「さっきのお話の続きだけれど」

「さっきの、というと？」

「フェイトとのおつき合いのことについてよ」

む、まだ何かあるのだろうか。俺は警戒して、弥が上にも気が引き締まる。

わざわざフェイトが不在の場で切り出すくらいなのだから、彼女に聞かせられない内容だということは想像に容易い。

「あなたたちの交際はもちろん認めるわ。もともと、私も応援していたことだから。でもね、血の繋がっていないとしても母親としてはその……、あなたたちに年相応の節度を持ったおつき合いをしてほしいと思うの。」

あ、そんなに難しいことじゃないのよ？　ただ、あの子……そういうこと（……）に少し疎いというか鈍い子だから、攸夜君に気にかけてもらいたいなって」

ほら、女の子はいろいろと大変でしょう？　とやや言葉を濁す疑問系で結尾が切られた。

……なるほど、そういうことか。確かにフェイトには聞かせられないな。直接的な表現は避けられてるけど、言葉の意図は容易に掴める。念を押したいのだろう。

「仰りたいことはわかっているつもりですし、リンディさんが懸念するのはもっともだと思います。」

安心してください。もともと少なくとも中学を卒業するまでは、プラトニックなつき合いにとどめていこうと思ってましたから。フエイトのこと、大切にしたいし……何より俺たちはまだ、子どもですしね」

大切にしたいというのは勿論、偽らざる想いだ。けれども、そこに俺自身の感情が含まれていることも否定できない。

俺のポーカーフェイスは見抜かれなかったようで、リンディさんの表情が和らいだ。

「そう、わかってくれているなら私からはもう言わないわ、無粋なものね。……信じてますからね、攸夜君？」

リンディさんの浮かべるいわゆるコロす笑みに、背筋が総毛立つ。冷や汗をダラダラと流して、脊髓反射的にぶんぶん首を縦に振っていた。

ドラ息子の本能という奴だろうか、この人にはたぶん生涯逆らえないだろうというイメージが脳裏を過ぎる。

とはいえ、反目したりするつもりなど毛頭ない。やぶ蛇になってもつまらないし、何より俺の今の基本的な行動方針は「親善親睦親和親交」——当然相手にも寄るけど、敵対するより味方にした方がずっといい。人間関係を円滑に、よりよい方向に進めるには時に譲歩し、自分の意志を曲げることだって必要だ。

まあ、人類みな兄弟、なんて妄言は吐かないけどな。

「さて、と、堅苦しいお話はこれまでにしましょうか。素直にお願いを聞いてくれたご褒美ってわけじゃないけど、フエイトのアルバムでも見てみる？ 昔のフエイト、ちっちゃくてかわいいわよ」

なん……だと……！？

「是非ッ、是非に見たいですお義母さんッ！」

「あらあら、気の早い子ね」

俺の問題発言を優雅な微笑で流すリンディさん。どうやら満更でもない様子だ。

そのあと、アルバムの写真を肴に大いに盛り上がった。

風呂から上がったばかりのフェイト——レモン色でわんこ柄のパジャマはかなりかわいかった——に見つかって、恥ずかしがった彼女と一悶着あったのはまったくの余談である。

こうして、初日の夜は賑やかに更けていった。

女子校——それは女の花園。魅惑の言葉。男どもが入り込めない禁断の領域だ。

そんなところに、俺は居る。

ふはは、羨ましかろう愚民どもッ！……とか言いつつぶっちゃけ何らかの感慨があるわけでもなかったりするんだが。

何故なら俺は、今も昔もフェイト一筋だから。他の女の子なんて眼中にないのだ。

さておき、時は真昼。

女学生たちが弁当片手に、思い思いの場所でおしゃべりに花を咲かしている頃である。

聖祥大附属中の屋上、その一角。ニスの塗られた木製のベンチの上に立ち上がった（……）俺を取り囲む、五つの大きな人影。誰もが見惚れる見目麗しい美少女たちだ。

「——で、この薄汚いのはなんなわけ」

人影の内の一つ——見上げるように巨人なアリサが言う。いや、俺の方が小さいんだけど。

しかし、薄汚いなんて失礼にもほどがある。風呂くらい毎日入ってるっつーの。

「薄汚いとは何だツンデレ」

「ツンデレ言うなっ！……ってやっぱり攸夜、アンタだったのね」
「なんだかわいいよね。なんの動物だろう？」

頭痛を感じたように額に手を当てるアリサ。ほんわかとした雰囲気ですすがほんわかとした感想を述べると、なのはがそれを受けて口を開く。

「えっと……たぶん、フェレット、かな？」

「たぶんじゃなくて、フェレットなの。ユーノのヤツからコピったんだ」

そう。俺は今、フェレットに姿を変えているのだ。真っ黒なイタチを想像してもらえばいいだろう。……言うまでもないと思うが、どこぞのハーブみたいな名前したエロオコジョみたい、公序良俗に反するようなことは何一つしてないぞ。ずっとフェイトと一緒にだったし。

「ユーノくんからコピったって……」

「フェレットモード、けっこう便利だね。私もユーノから教えてもらったから使えるよ」

「ふえっ、そうなのっ！？ そんな話、私聞いてないよっ！？」

フェイトの何気ない一言に、やにわに動揺して食ってかかるのは。ふーん、珍しいこともあるもんだ。……ユーノのこと、意識しだしてきたのか？

そのまま目をぐるぐるさせて暴走するイノシシ娘を「まあまあ落ち着いて。あとで教えてもらえばええやん」とはやてが至極真つ当な正論でなだめ、話題を変える。

「しかし、なんでまたフェレットのカッコでこんなところにおるん？」

「いや、フェイトがどうしても離れたくないって言うもんでな。こ

うして、小動物の姿で近くに居たんだよ。たまに念話したりなんかしてさ」

なあ？ と視線を上げて同意を求める。赤面したフェイトからの返答は、「う、うん……」とまるでシャボン玉のように尻すぼみ。まったくめんこい娘さんだこと。

「うんまあ、そないなカッコしてる経緯は理解したけどな……」

歯切れの悪いはやてに、なんか文句あんのか、と視線で問い掛ける。

すると微妙な表情をしたはやては、困ったように周りを見回す。フェイト、なのはとアリスは首を傾げているが、すずかだけはどうやら意図が読めたようで苦笑いした。

「なんつーか、真っ黒やし」

「体毛の色なんだから仕方ないじゃないか」

イタチ科の生き物で黒一色の種類は居ないんだよな、確か。どうでもいいトリビアだな。

「言いたいことがあるならはつきり言えって」

ちびだぬき——もとい、はやては神妙な面もちので勿体ぶった間を作る。ゴクリ……、無意味な緊張感に誰かが喉を鳴らした。

「あんな……」

そして、ついに重い口が開かれる。

「なんかその姿、ヒワイな気がするんよ」

「ひわっ、卑猥いっ!?! なんでさッ!?!」

「黒いし、長っ細いし」

ぐ、ぐぬっ……! 否定できない……ッ!!

ナニを指しているのか理解したなのはとアリサが頬を軽く染めて俯く。相変わらずフェイトはぼやんとしてるが。

「そ、そういうイジられ方するのはユーノの持ちネタじゃないかッ!!」

「そのセリフ、ちょっと聞き捨てならないんだけどなー」

再起動を果たしたなのはから浴びせられたのは、ツンドラのごとき冷たさを帯びた声。

「うー! うーうー!」

進退窮まった俺。逃げるようにベンチから飛び降りて、開けた場所に変身魔法を解除。ボン、と愉快的破裂音と白煙を巻き上げて元の姿に戻る。その服装は黒い学ラン——廃棄都市で、真行寺命たちを待ち受けていた際にも身に着けていた輝明学園秋葉原校中等部指定ものだ。

「これでいいんだろ! これで!」

「……なにも泣かなくてもいいじゃない」

呆れたアリサのツツコミが、グサリと胸の柔いところに突き刺さった気がした。

* * *

昼休みの時間は有限だ。

気を取り直して昼食を摂ることに。なお、さっきの茶番で負った心的外傷はフェイトに癒やしてもらいました。

「あれ？ フェイトちゃん、お弁当は……？」

「あ、うん、それはね」

なのはの素朴な質問に、手ぶらのフェイトが嬉しさを溢れさせてこちらを向く。

俺は軽く笑みを返すと目の前に両手をかざした。

ヴンツ、と音を立てて月衣の中から、三十センチ四方二段重ねで漆塗りの豪華な重箱が手の中に現出する。早朝から借りたキッチンにて作った自信作だ。

ついでに六畳ほどもある大きな莫座を出してやる。

「さあさ、お前らもぼーっとしてないで座れ座れ」

ひとまず重箱を床に置いた後、莫座をバサリと広げて硬直しているのはたちを促す。まあ、理由はわかるが。これくらい慣れろ、“魔法使い”の基本だぞ？

事前に伝えていたフェイトは当然フリーズなどせず、さっさと俺のすぐ隣に着席。ちよつと遠慮気味なのがまたかわいらしい。

「ナップザックん中から竹箒が出てくるんも衝撃やけど、これはこれで効くなあ」

「何言ってんだ。俺にしてみれば宝石とかバッチが杖になる方が驚くつーの」

「どっちも非常識よ！」

さすがバニングスさん、鋭いツツコミをありがとう。

ああ、ファー・ジ・アースの魔法科学でも似たようなことが出来るって指摘は簡便な？

「「「「いただきます」」」」

「どうぞ召し上がれ」

そんなこんなで昼食。

かなり多めに作ってきた弁当をフェイトはもちろん、なのはたちにも振る舞った。

俺も含め、皆食べ盛りな中学生、好評の内に次々とおかずが減っていく。女の子ってのはみんな少なからず食べるのが好きだしな。で、おかずをあんまりにも食べられるもんだから、フェイトがへそを曲げてしまい、機嫌を取ろうと「あーん」ってしたらしこたまからかわれたのには参った。……フェイトには悪いことしたな。

「——ところで攸夜君、学校ってどうしてるのかな？」

和気あいあいと食事が進む中、どこか非難するような声色で問うすずか。鋭い洞察はさすがだが、その不良を見るような目つきは止めてほしい。

「ちゃんと行ってるよ。こっち（・・・）じゃないけどな」

「こっちじゃない言うたら、ファー・ジ・アース？」

「正解。毎度おなじみ輝明学園秋葉原校の中等部に一応在籍してるよ」

なにが毎度おなじみよ、というアリサを華麗にスルーしてイモの煮っ転がしをパクリ。……んむ、我ながらなかなか上手く味が染みている。悪くない。

——こちらから主八界に渡った俺は、マジカル・ウォー・フェア最終決戦のおよそ五年前に転移していた。殆どの力——ウィザードとしては十分すぎるほどだったが——を封じられた状態で、だ。

それが戻ったのはオリジナルの宝玉が砕け散った後のことであり……、そういうわけもあって帰還には思いの外時間がかかってしまった。

で、俺はその時間のズレを「ちゃんと義務教育くらいは受けなさいよ」という母さんの意向と判断し、輝明学園秋葉原校に紛れ込んで生活していたのである。あそこ、門度が広いから俺たち裏界勢力も入り込みやすいし、社会勉強の一環でウィザードとして活動するにもいろいろと都合がいいからな。

この辺りの話は昨夜リンディさんたちを交えて説明してある。それ故か、フェイトは熟知り顔でだし巻き卵をパクついていた。しかしフェイト、箸の使い方が様になったな。

だがひとつだけ、こちらに来て説明していないことがある。力が戻ったあとに決行した裏界での武者修行についてだ。

自重しない馬鹿どもとやり合って腕や脚を潰されたり、内臓破裂などで死にかけたことなど一度や二度じゃない。………主にグラシーとかグラシーとかグラシーとか、あとたまにマルコとかにも。

そんな、刺激の強すぎることを話したらフェイトなど卒倒しかない。言わぬが花、というヤツだ。

「でも、攸夜くんここにいるよね？ サボリ？」

「ああ、それは現し身を置いてだな」

「現し身、って？」

「実体のある分身みたいなもんだと思ってくれればいいよ。で、そいつを替え玉にして、たまに送ってくる情報を受け取ってるって寸法さ」

「なんや、どこぞの金髪碧眼忍者みたいやな」

「訓練の効率が倍々になったりとかはしないけどな」

エミユレイター、魔王というのは何も常に日本だけで活動してるわけじゃない。複数の国、複数の場所で並列的に策動することも必要だろう。そんな場合に、こういった情報召集用の半自立型現し身を用いることもある。

……まあ、どういうわけか揃いも揃って日本にご執心な奴らばっかなのが不思議だけど。

便利な現し身であるが、気を付けなきゃいけないのは増やしすぎると本体や現し身自体が弱体化することだろう。現し身の作成に魔力や“プラーナ”が削られて死に体になった、なんて目も当てられない。本末転倒もいいところだ。

そういや、分身しすぎて自分の首を絞める冥魔王が居る、とか姉さんが笑い話にしてたつけ。えーと、名前は確か――、エン、エン……エンなんとかさん？

閑話休題。

「だから俺はちゃんと学校に通ってるんだよ。この制服も中等部のものだしな、生徒会長用の」

ふーん、と声を揃える一同。

「……………」

数瞬の沈黙。

不自然な間を訝しみ、眉間の皺を深くすると――――

「「「ええええええーっ!?!?」」」」

驚愕極まりない、悲鳴のような声が見事にハモる。何がそんなに驚

きなのかは知らないが、仲のよろしいことだ。

「う、ウソよっ！ そんなの信じないんだから！」アリサが声高に否定する。目がなんか虚ろだ。

「せや、なんかの間違いに決まっとる！ 攸夜君がそんなことするんて世界の終わりやっ！」同調して頭を振るはやて。飛躍しすぎだ馬鹿野郎。

「うえっ！？ だって、生徒会長さんだなんてそんなつ、ふええええっ！？」なのは、お前は吃りすぎだ。少し落ち着け。

どこかズレてるフェイトは平然として「ユーヤ、すごいねっ」、と屈託のない尊敬の込められたキラキラする眼差しを向けられた。まあ、悪い気はしないな。

同じく落ち着き払った様子のすずかが、「あっ」と何かに気づいたように声を上げる。

「そういえば攸夜君、クラス委員とかしてなかったっけ？」

「あー、言われてみればそんなこともあったような。……よく覚えてるわね、すずか」

「うん。攸夜君らしくないな、って印象に残ってたから」

すずかのセリフに騒然とした空気が静まった。

らしくないのは認めるが、他人に仕切られるくらいなら自分でやった方がマシじゃないか。どうせ決めるのにゴタゴタするなら自薦した分、時間の無駄もない。ついでに俺がやるんだから完璧に仕事をこなすしな。

「はふう……なんだか私、ますます攸夜くんがなにやってたのか気になってきたよ」

「そんなこと言われてもな」

力いっぱい騒いで疲れたのか、ぐったりした様子のなのはが嘆息する。

「————そのご質問、僭越ながらこの私がお答えしましょう」

不意に響く、甘くとろけるような女性の声。背後の空間が歪むのを関知して、すぐさま振り向く。

そこにはこの数年で嫌というほどよく見知った、眼鏡のメイドが営業スマイル全開で佇んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9979x/>

魔法大戦リリカルなのは☆ういざーずっ！

2011年11月13日22時42分発行